Ⅱ 遺　　構

1　遺跡の概観

調査地の北には、北新大池があり調査地との間には池の築堤が東西に存在する。調査地の南には通称大宮通りが、東には市道が通る。いずれも調査地より１ｍほど高く、築堤状をなす。調査地の西だけに現在も畑と水田が残り、調査地も工場用地となる前は水田で、水田面は東へ向かうに従い、徐々に低くなる、平城宮第一次朝堂院地区の乗る尾根の末端が調査地西側にまで延びてきているためである。調査地の市道をはさんだ東側一帯も現在は水田であるが、近隣の開発にともない駐車場用地としての開発が盛んである。

調査地の層序は、一部に残る盛土の下に水田時代の旧耕土・床土があり、その下に遺物包含層である黄褐粘土層がある。黄褐粘土を除去すると、暗褐色粘質土の地山上で奈良時代の遺構が検出された。今回の調査では、一部に古墳時代の土壙と思われる遺構を検出したが、撹乱のため全容は明らかでない。調査地北半部には東西方向の耕作溝が検出されたが時期は明らかでない。遺物は前後の時代を含む。黄褐粘土層は、弥生式土器片から中世の竜泉窯系青磁椀の破片までの広範囲の遺物を含む。調査地中央東よりのSK5772周辺に堆積する黄褐粘土層下の暗灰褐砂質土中からは、６世紀代の須恵器がまとまって出土した。

fig.4　周辺の開発状況

2　遺　　構

今回の調査では、13棟の掘立柱建物のほか、６基の土壙（大量に土器を捨てた穴）、５基の井戸、道路２条、掘立柱塀１条や素掘りの溝などが発見された。以下、各遺構ごとに解説する。遺構は一連の番号を付し、遺構の種別を表すために、SA 塀、SB 建物、SD 溝、SE 井戸、SF 道路、SK 土壙の記号を遺構番号の前に付し表記する。

A　掘立柱建物

SB5751　発掘区の北西隅に位置する梁間２間（4.2m）×桁行２間（3.2m）以上の南北棟で、柱間寸法は桁行方向で1.6m（5.5尺）等間、梁行方向で2.1m（７尺）等間である。桁行柱穴（掘形）は１辺が40～50㎝と小さい。

SB5752　発掘区の北西隅ちかくに位置する南庇つきの南北棟。平面は桁行３間（5.5m）×梁間４間（5.6m）で、身舎の梁間を３間と長くとるところが特徴的である。柱間寸法は、桁行方向が1.8m（６尺）等間、梁行方向が1.4m（4.5尺）等間で、庇の出も1.4m である。柱穴は、身舎・庇ともに１辺が40～80㎝で、東妻と南側柱筋で４本の柱根が残っており、最大のもので直径18㎝（６寸）ある（fig.6）。

SB5753　発掘区の北半中央から東壁にのびる長大な南庇つきの東西棟。近代の撹乱により、多くの柱穴が失なわれているが、平面は梁間３間（4.2m）×桁行５間（13.0m）以上と推定される。柱間寸法は、身舎が桁行方向で2.6m、梁行方向で2.7m と、いずれも９尺等間に復原できるが、庇の出はこれより長く、3.0m（10尺）となっている。柱穴は他の建築遺構よりも大きく、身舎で１辺90～110㎝、庇で１辺60～80㎝である。

SB5754　発掘区の北半西よりに位置する東庇つきの南北棟で、桁行５間（9.9m）×梁間３間（6.3m）の平面を明確に検出した。柱間寸法は、身舎が桁行方向で2.0m（７尺）等間、梁行方向で1.9m（6.5尺）等間であるが、庇の出は2.5m（8.5尺）で、SB5753と同じく、身舎柱間よりも長くとっている。柱穴はSB5753よりもわずかに小さめで、身舎が１辺90～100㎝、庇が60～90㎝である。

fig.5　SB5752・5754

fig.6　SB5752　柱穴断面

SB5755　発掘区の北半西よりに位置する、桁行５間（9.5m）×梁間２間（3.8m）の東西棟。柱間寸法は、桁行・梁行方向ともに1.9m（6.5尺）である。柱穴は１辺50～80㎝で、13棟のなかでは中規模に属する。

SB5756　発掘区の中央西よりに位置する２間（5.6m）×１間（2.1m）以上の建築遺構だが、北半部分が撹乱のため検出できず、全体平面は確定していない。しかし、遺構の北側に柱筋のそろう柱穴が存在しないので、２間×２間の小規模な東西棟に復原できよう。柱間寸法は桁行方向で2.6m（９尺）等間、梁行方向で2.1m（７尺）である。柱穴は、一辺50～70㎝。

SB5757　発掘区のほぼ中央に位置する南庇つきの東西棟。井戸SE5767を埋めた上に、この建物を建てている。桁行３間（4.8m）×梁間３間（5.9m）で、身舎の柱間寸法は桁行方向で1.6m（5.5尺）等間、梁行方向で1.9m（6.5尺）等間である。庇の出は2.1m（７尺）で、やはり梁行柱間より長くとっている。柱穴は身舎が１辺60～80㎝、庇が50～70㎝で、南側柱筋の西から２列めに柱根がのこっているが、腐朽がいちじるしい。

SB5758　発掘区東壁が鋭角状に突起する部分に位置する南庇つきの東西棟。桁行２間（5.9m）以上×梁間３間（9.5m）で、身舎の柱間寸法は桁行・梁行方向ともに3.0m（10尺）等間だが、庇の出は3.5m（12尺）と身舎柱間より長くとる。柱穴は、身舎が90～120㎝、庇が60～80㎝と13棟のなかでは最も規模が大きい。遺構の中央～東半部分は市道の下で今後しばらくは発掘不可能と思われるが、柱穴規模および梁間寸法との関係などからみて、桁行５間以上の大規模建物である可能性が大きい。

SB5759　発掘区の中央西よりで、SB5756のわずかに南に位置する東西棟。撹乱のため、南側柱筋の柱穴の大半が失なわれているが、北側柱および東西両妻の柱穴

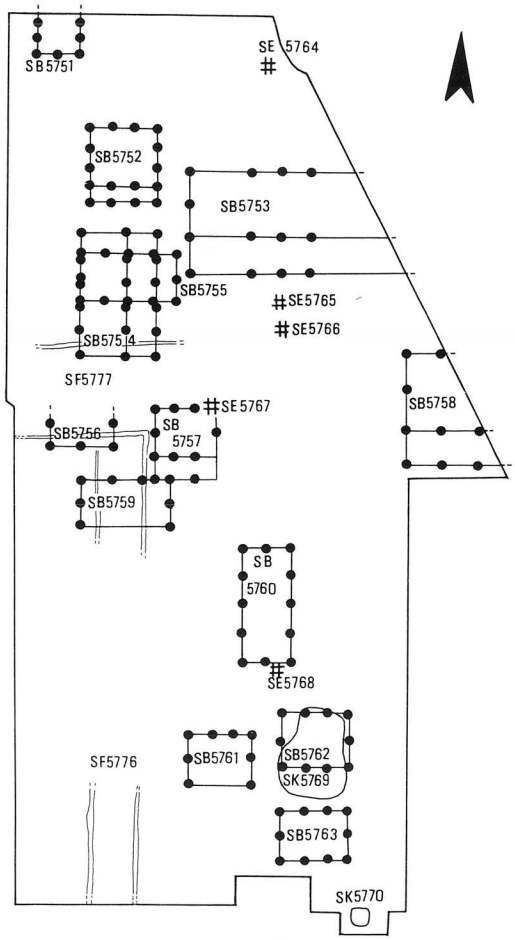

fig.7　遺構配置図

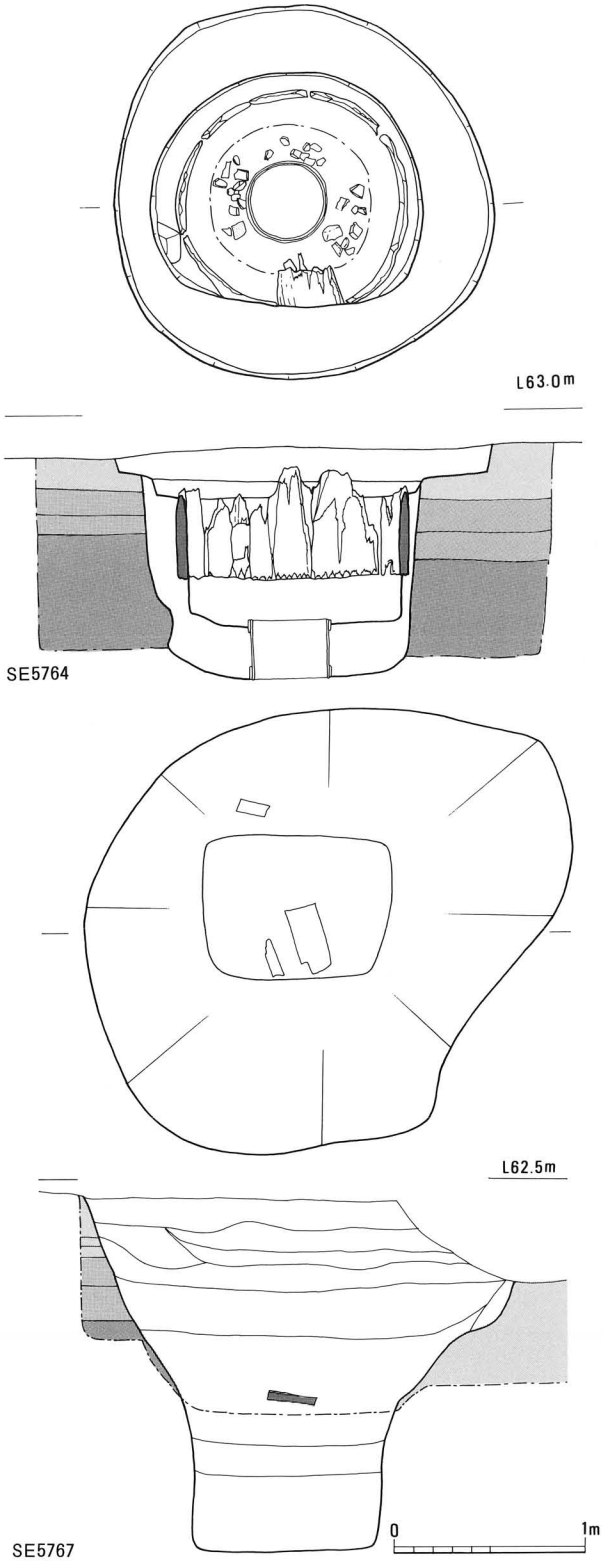

fig.8　SE5764・SE5767

はいずれも明確で、3間（6.5m）×2間（3.5m）に復原できる。柱間寸法は桁行方向で2.2m（7尺）等間、梁行方向で1.8m（6尺）等間である。柱穴は1辺が50～90cmで、東妻の中央柱穴に柱根（直径9cm）が残る。

SB5760　発掘区の中央南よりに位置する南北棟。桁行4間（9.4m）×梁間2間（4.0m）で、柱間寸法は桁行方向で2.4m（8尺）等間、梁行方向で2.0m（7尺）等間である。柱穴は1辺が50～90cmとばらつきがある。

SB5761　発掘区の南半中央に位置する東西棟。撹乱によって南北側柱のうち3本分の柱穴が検出できなかったが、桁行3間（6.0m）×梁間2間（3.8m）に復原できる。柱間寸法は、桁行方向で2.0m（7尺）等間、梁行方向で1.9m（6.5尺）等間である。柱穴は1辺が50～80cmで、中規模にあたる。

SB5762　発掘区南半中央東よりに位置する東西棟。大土壙SK5769が埋められたあとに建てられた、桁行3間（6.0m）×梁間2間（4.8m）の掘立柱建物である。柱間寸法は、桁行方向で2.0m（7尺）等間、梁行方向で2.4m（8尺）等間である。柱穴は一辺が40～80cmで、西妻柱と東南隅柱に柱根（直径11cm・14cm）が残る。

SB5763　発掘区東半中央南壁よりに位置する東西棟。桁行3間

(5.5m)×梁間２間（4.0m）で、柱間寸法は桁行方向で1.8m（６尺）等間、梁行方向で2.0m（７尺）等間である。柱穴は60～90cmと、平面規模のわりには大きめといえる。西南隅柱の柱根（直径７cm）が残る。

B　井　戸（fig.　8－10）

SE5764　発掘区北東隅に位置する円形縦板組井戸。掘形・井戸枠ともに円形で、掘形の直径約２m、井戸枠の直径約1.2mである。井戸枠は、湾曲加工した縦板を６枚をつなぎあわせて円筒形をつくる独特の構造で、底の中央には曲物をすえる。曲物の周囲には小石と瓦の小片を敷く。

SE5765・5766　隣接する２基の井戸で、掘形の重複関係からみると、南側のSE5766が古く、北側のSE5765が新しい。

SE5766は方形縦板組の井戸枠（90×90cm）を残し、掘形も方形である。３段の横桟の

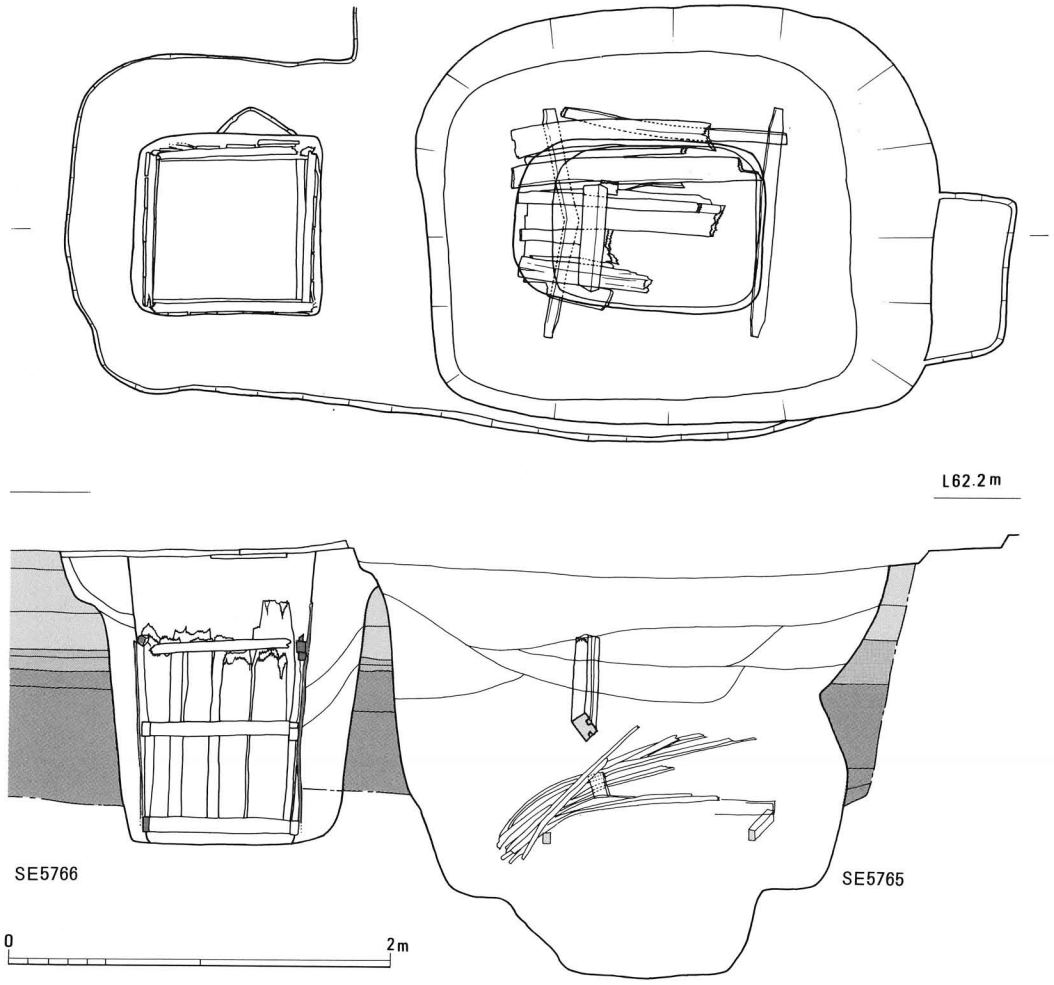

fig.9　SE5765・5766

外側に、各面６～８枚の縦板をおく。

SE5765は直径約2.5m の大きな楕円形の掘形の中央に、方形縦板組井戸枠をおく。井戸枠はほとんど抜き取られているが、おそらく抜き取り時に掘形が崩落したためだろう、最下段の横桟４本と、南側の縦板、縦桟の一部が残されていた。横桟は長さ約1.2m。縦板は計11枚が残り、北側に大きく湾曲しながら倒れ込んでいた。縦桟の一部には、井戸と関係のない仕口と、鉄釘が残されており、転用材である。

SE5767　発掘区のほぼ中央に位置する。一辺約2.2m の隅丸方形状の掘形をともなうが、撹乱により東側約半分が失われている。井戸枠はほとんど抜き取られ、かろうじて縦板１枚だけが残存する。

SE5768　発掘区の南半中央東よりに位置する小形の井戸。掘形は１辺が2.0～2.4m の不整長方形を呈し、井戸枠は１辺約70㎝の正方形横板組。横板は北面が５段で、他は４段。横板の外側には、各面７～９枚の縦板をおく。横板に続けて曲物を２段にすえる。

C　土　壙

SK5769　発掘区南半中央東よりに位置する。南北７m、東西６m の大きな不整形土壙で、深さは50～60㎝と浅いが、大形の須恵器甕Ａをはじめ大量の土器が出土した。底面に張り付いた状態で出土した土器群には、完形の須恵器が多く含まれる。須恵器甕Ａも分散することなく同一個体の破片がまとまって出土している。ただし甕を据え付けた痕跡は認められない（fig11）。

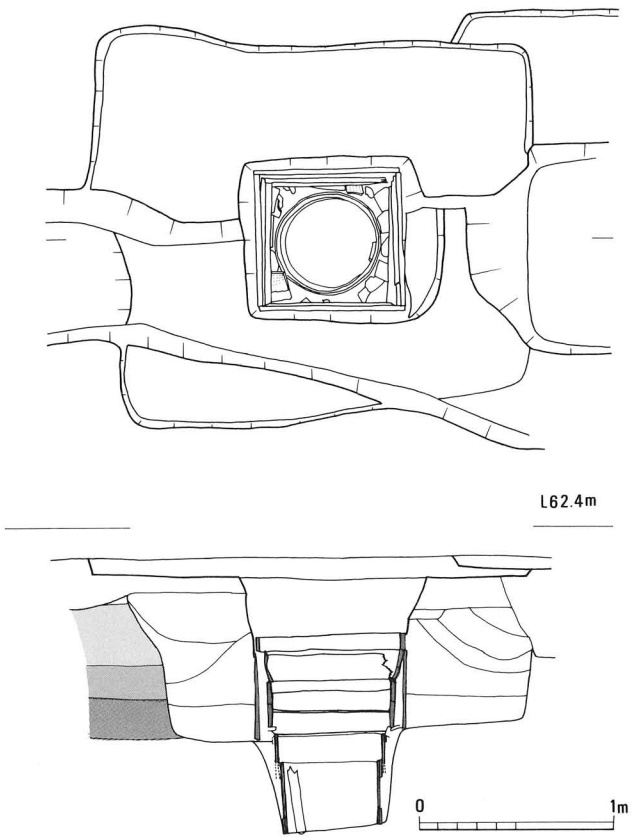

fig.10　SE5768

SK5770　発掘区南東隅の拡張区に位置する。東西約２m、南北1.5m の不整形土壙で、平面規模はSK5769よりも小さいが、深さは約１m と深く、大量の土器と銅製帯金具が出土した。

SK5771・5772・5773・5774　いずれも平面不整形で浅い土壙。

D　塀・溝・道路

SA5775　SB5760の東側前方1.8

m（6尺）の位置にならぶ掘立柱の南北塀。総長9.0m、5間の塀で、北端をSB5760の北妻にそろえる。柱間寸法は、1.8m（6尺）等間。

SF5776　発掘区の南半西よりで、南北方向に通る道路。道路幅は、両側溝間の心々距離で3.6m（12尺）。大きな撹乱によって南北に分断されており、南端は発掘区南壁からさらに南にのび、北端は東西溝SD5780によって区画される。SD5778が東側溝。残存遺構の上面幅49㎝、深さ28㎝の素堀り溝。SD5779が西側溝。残存遺構の上面幅42㎝、深さ15㎝の素掘り溝。

SF5777　発掘区の中央東よりで、東西方向に通る道路。道路幅は、両側溝間の心々距離で7.2m（24尺）。道路の西端は発掘区からさらに西にのびるが、東側はSD5779とSD5780が交差するあたりで途切れており、東端が明瞭ではない。SD5780が南側溝。いくぶん北にふれた東西溝であり、東端でSD5779と合流する。上面幅30～45㎝。SD5781が北側溝。SD5780とほぼ平行で、やはりわずかに北にふれた東西溝である。上面幅20～40㎝。

SD5782　発掘北半中央をながれる蛇行溝。西端はSB5754の西側柱列からはじまり、SB5754の下層をいくぶん南下してから東へのびてSE5765に分断されつつ、その東までのびる。上面幅30～40㎝。

SD5783　発掘区北壁から東壁に向かってながれる斜行溝。上面幅30～50㎝。

SD5784　発掘区東壁から西に約2ｍのところをながれる南北溝。遺物包含層の上面からすでに遺構を確認できたが、地山面まで掘り下げたため、遺構はあさくなり、一部は失われ分断される。上面幅15～45㎝。

fig.11　SK5769土器出土状況（1：60、略号：須＝須恵器、土＝土師器、番号はⅢ遺物の土器番号）